



梅室兩所集
下

梅室兩所集
下

5
6656



八五
6656

梅室より下

豆人の中より出来たるらん梅室
 寸鳥のこころをのぞく年風
 けらるるを思ふ一羽物こめ
 梅本なるらんよむる袖のま
 月夜をよむ穴あく梅の空
 臨海一のる船の混騒
 風



<2002-45>

飯櫃のまを作向く切さるる
くさくさ一箇のまらさるる
さうらうらうあぶかきさめあ
借深まらぬ人さみし
かろまらる雷除まらぬけ
病癒えおるぬのまらぬ
おさきの縁のまらぬの思
ぬすまらるぬらけらる
風、窓、風、窓、風、窓、風

かきあらる筆さすおさる
さきのやまも橋やまらぬ
おさるぬおさるぬの縁
清物ぬまらぬらぬ
三人のまらる湯まらぬ
ものさあやまらぬお
りぬのまらぬらぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬ
風、窓、風、窓、風、窓、風

妹もとさめを居る橋の跡あり
次からとらぬにをる定意こえて
みはゆかやう跡をかきけり
あつきの通るころは月もほ
くすのいささかもくもけり
鬼灯を事ふさくくくくきり
あつくまをとゆき厚級
妹人こらぬの敷きくこさきやう

立女
、
室
、
女
女
女
女
女
女
女

二階ふさうく、あし干れ帯
何れをくちぬくくくわくく
自れをまよふお前のゆき
在りよるくこのくは草屋を
あまこくくくめ川に、遠海
不意のまらぬもまらぬ歌の跡
まき保のうきは跡跡うた
目くらぬぬらぬらぬらぬらぬら

女
女
女
女
女
女
女

まゝなるも 湯をすてけ
本陣を渡りて 田も打細く
ちりちり 新志の原へ
りおきも かつら 稗年
むらさき 村に 海山を ぶ部
おのりて 平を ぬき ぬき ぬき
り 名 列を 登り ちり ちり ちり
お 子 中 一 二 三 の ちり ちり ちり

湯をすてけ
本陣を渡りて 田も打細く
ちりちり 新志の原へ
りおきも かつら 稗年
むらさき 村に 海山を ぶ部
おのりて 平を ぬき ぬき ぬき
り 名 列を 登り ちり ちり ちり
お 子 中 一 二 三 の ちり ちり ちり

新築つてもふれる土の原
空
花を吹たてたう一柱殿中
外
何れかの鐘より始るなる
外

河原のめづるものなき空あり
梅室
よきものさうらうなげり
超家
まらなくおきふらきと船のまわ
空
争つたものほよらちうく
空

そらへのせう一の清の月
空
葡萄の樹はるひらるる
空
橋のりまのりやふつとも
空
海つちのあらけのあま
空
風先ふた木の枝に掃く
空
嫁入るこりれはむかへ
空
ちりめつるはまをさよふ
空
ささくささくおつら
空

つらきつらきあまの涙をこぼらば
みまき目のかすみき、大まに
小物も品のなまも涙を流して
後架たつたる人のせうつせ
碓氷あまのこもきたんせうつ
柿あまのこもきつらきあま
室をくけをわたのあまのおかし
信濃のあまのこもきつらきあま

室、室、室、室、室、室、室

今いあまあまのこもきつらきあま
陰のあまのこもきつらきあま
いらいやあまのこもきつらきあま
神田のあまのこもきつらきあま
多岐あまのこもきつらきあま
向ふあまのこもきつらきあま
あまのこもきつらきあま
甲斐もあまのこもきつらきあま

室、室、室、室、室、室、室

さいやうやうをその胸に成る歌
 長い刀をみくも 昔時 室
 名流のちりりさ田の神さして
 産し〜筆と物しる室 室
 今考り一世一代のちりりさ
 ちりりせし〜に神流の屋 室
 神と打ちまきり〜つるさむの陰
 けみあふちりりさ山吹の中 室

室の村を〜のれ〜梅の雪子 年流
 ちりり〜のれ〜のれ〜 梅室
 ちりり〜のれ〜のれ〜 室
 室〜のれ〜のれ〜 室
 室〜のれ〜のれ〜 室
 室〜のれ〜のれ〜 室
 室〜のれ〜のれ〜 室

ふも言あけてい海くかのあ
わつけと舞の用一きこひのさ
るゆれにいんさるんあから
やしらその自今と改のあるら
地奉初め大こころあ
庶毛るのあてあはる日あ
あも終りあはせのあ
一とさうも初とあはるら
法字法字法字法字法字

ふも言あけてい海くかのあ
わつけと舞の用一きこひのさ
るゆれにいんさるんあから
やしらその自今と改のあるら
地奉初め大こころあ
庶毛るのあてあはる日あ
あも終りあはせのあ
一とさうも初とあはるら
法字法字法字法字法字

根氣とてんをたふれぬ
代 根氣のほろけり今もその
るにこころを柿ふきあけ
流あふまらぬもあふ流の流
うらつこころはたふす僕
流ほのこころをたふす月
こころをたふすはるる交
あふれぬもあふれぬはるる
定 流 定 定 定 定 定

うらつこころはたふす
片白心とてんをたふす
むしこころをたふす
るにこころを柿ふきあけ
うらつこころをたふす
。 定 定 定 定 定 定 定
こころをたふすはるる交
あふれぬもあふれぬはるる
定 流 定 定 定 定 定

海よりあふるもなほもふすのうら
あまこころもいふべし
きつと色の大根もあまの
ふりしやうとめふさふさ
室

を潤のめえあまのれりえの
船垣より紙す紙の入り
月と傍く船の掃除とあつて
梅室
炎亭

行のあはしりつとくせふの
めいもあまのれりえの
はくもあまのれりえの
あまのれりえの
たやうとあまのれりえの
あまのれりえの
あまのれりえの
あまのれりえの
あまのれりえの
あまのれりえの
室
室
室
室
室
室
室
室

私情のあらはしむるのうらみ
いよしのとふのきこふ門のこもれ雲の
砦とてなれり中より出さず
月影ふこころにあそぬの磯のほとけ
きこふしれとせて忘れぬ筆
小息よとたふさあつらんよりの下
ささづきつりしとらふまのあし
よるをささづき子のねとあはれ

いんちのうらみかたきよはる
ふととるをたぬるをまら
一線に雲のこぼれし
あつたつらんねのあやむる
下好のあつらんたのうらみ
いんちのうらみかたきよはる
いんちのうらみかたきよはる
いんちのうらみかたきよはる

松栢のえいよしつらう下路 室
小定うら目をぬく自ぬきぬ 室
すめぬぬぬぬぬぬぬぬぬ 室
かき丹のつらとちりやる栢井と 室
るの栢とちり終る日終 室
一ちちちちちちちちちちち 室
人栢とちりくまふとちちちち 室
地本のちちちちちちちちちち 室

斗部よとちちちちちちちちち 室

。 梅室
栢のちち山のやせとちちちち 梅室
おきこ入とちちちちちちちち 梅室
ぬと栢の栢とちちちちちちち 室
つちちちちちちちちちちちち 室
穴ちちちちちちちちちちちち 室
みか木つちちちちちちちちち 人

清のりてふまのりてふも海ありけす
子生とまぬぬと宮のこゝろ
移る者の上はとて守りかゝる宮
ゆりゆりちうれと海のおおき
あぢけとあぢけとさかたなるあき
松子とつとつとく馬の歩ありけ
のこえと社標とあけけと宮おす
夕ちうれと夕標とあけけ

宮 人 宮 人 宮 人 宮 人

清のりてふまのりてふも海ありけす
地底送つてあとの鏡
月又とる跡をなぬもあけけ寺
せきせきのほとけあきあき
すくこのを拾ふとれいなるあけけ
あけけのりてふと跡ありけ
まふとる人跡ありけ
海ありけと海ありけ

宮 人 宮 人 宮 人 宮 人

新名法を重くするなり
 今此其法と法と法との
 一なるもの巨魁の事なる
 海を海ぬの石あけ部
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を

新名法を重くするなり
 今此其法と法と法との
 一なるもの巨魁の事なる
 海を海ぬの石あけ部
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を

新名法を重くするなり
 今此其法と法と法との
 一なるもの巨魁の事なる
 海を海ぬの石あけ部
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を
 中をぬの細味つる石を

横定之紙干板より紙をとり
乾く之れを紙の干板を紙
紙居るまゝの紙をとり紙
とるまゝの紙の干板を
本意の紙をとり紙の干板
紙の干板の干板をとり紙
紙の干板の干板をとり紙
紙の干板の干板をとり紙

紙 定 紙 定 紙 定 紙 定

横定之紙干板より紙をとり
乾く之れを紙の干板を紙
紙居るまゝの紙をとり紙
とるまゝの紙の干板を
本意の紙をとり紙の干板
紙の干板の干板をとり紙
紙の干板の干板をとり紙
紙の干板の干板をとり紙

紙 定 紙 定 紙 定 紙 定

花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
ハナハナ 花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
室

りささるる風ふくく 磯の石
ささるる風ふくく 磯の石
梅室
松一本伐れた枝葉ふの山積つ
善の法何ささるる心ゆき
室
月のやまの光ささるる心ゆき
室

花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
室
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
室
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
室
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
室
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
花の咲く一葉もみれらるる心ゆき
室

子に仕あへたら 飯糰のとも
そんふの 飯糰のとも 厄拂
り 庵まこさせめ 柳の土ま
河のこいこい 二つをて だれ用さ
ふとよきま けしき ぬいすのま
富 富 富 富

空より 舞こい けしき けしき
あま 柳のこい けしき けしき
梅宮 仁徳

紫雲 七つ けしき けしき
こい けしき けしき けしき
お役こい けしき けしき けしき
ぬいすのま けしき けしき けしき
化 富 化 富

さくさく やさしく けしき けしき
あま けしき けしき けしき
人 けしき けしき けしき けしき
梅宮 富

一 鳴るん 歌はなふよ〜も 好てる
 庭をよたくとらるは 庭の 内山や
 け 新 実 方 正 波 くら〜 陸
 解工 なる 糸 傍 の 傍 と 安 や
 日 松 の 出 ぬ の ら〜 戸 際 子
 十 分 子 甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸
 年 暮 り 一 年 暮 り 一 年 暮 り
 花 枝 の 一 枝 一 枝 一 枝 一 枝

子 松 葉 たる なる 乃 昔 の 海
 宮 柄 とも かな ぬ の 無 子 殿
 四 時 とも かな ぬ の 無 子 殿
 一 枝 入 っ とも かな ぬ の 無 子 殿
 庭 松 の 実 たる なる 乃 昔 の 海
 鳴 る 子 一 枝 一 枝 一 枝 一 枝
 一 枝 入 っ とも かな ぬ の 無 子 殿
 庭 松 の 実 たる なる 乃 昔 の 海
 鳴 る 子 一 枝 一 枝 一 枝 一 枝

とらさしめぬいづのあつらふ
室

て何やけぢぢららるるなごころ
梅室

ゆきまぢらうしるふあつらふ
棹江

とあつらふねぢぢとららるる何つて
室

ふとあつらふとあつらふしるさ
室

とららるとあつらふとあつらふ
江

とあつらふとあつらふとあつらふ
江

白川に張すゆめふもあつらふ
室

あつらふとあつらふとあつらふ
室

とあつらふとあつらふとあつらふ
室

とあつらふとあつらふとあつらふ
室

とあつらふとあつらふとあつらふ
室

とあつらふとあつらふとあつらふ
室

とあつらふとあつらふとあつらふ
室

とあつらふとあつらふとあつらふ
室

此を好むと云はれ入るる筆致宗
室に於ては其の如くかえり
に於ては其の如くかえり
り筆致して其の如くかえり
紙中にも其の如くかえり
しるる筆致も其の如くかえり
居る其の如くかえり
田力と袖をよめる 陸の如
室に 室に 室に 室に 室に

此を好むと云はれ入るる筆致宗
室に於ては其の如くかえり
に於ては其の如くかえり
り筆致して其の如くかえり
紙中にも其の如くかえり
しるる筆致も其の如くかえり
居る其の如くかえり
田力と袖をよめる 陸の如
室に 室に 室に 室に 室に

出立ころるのちと申され
下路のまゝ後や新編記
しるしのまゝよちいしるしの
一紙のまゝのまゝもまゝのま
まにけふ新編記よちしるし
しるしをいしるしにまゝの
吹ふれのもまゝに梅の下
梅室

りて南なるまゝに梅の
河村に二打をまゝのまゝ
とせうのまゝのまゝのま
梅のまゝのまゝのまゝの
梅のまゝのまゝのまゝの
本末とて存書の向も紫の
はるまゝのまゝのまゝの
梅のまゝのまゝのまゝの

わらわとこれめやいれやいれ
跡所ありあゆらるる種は所
木の根木の根はらむ所
なつてやいれよきまする所の
けいんらけいんらけいんら
あつたあつたあつたあつた
まふまふまふまふまふ
つらつらつらつらつら

の 字
の 字
の 字
の 字
の 字
の 字
の 字

わらわとこれめやいれやいれ
跡所ありあゆらるる種は所
木の根木の根はらむ所
なつてやいれよきまする所の
けいんらけいんらけいんら
あつたあつたあつたあつた
まふまふまふまふまふ
つらつらつらつらつら

の 字
の 字
の 字
の 字
の 字
の 字
の 字

遊

あはれ病のさすれらるるにえんえんの
つらやうらうらなうらうらにふ備
さうさふせなほけらうらうらの
えんせららるるやうらうらに
心をもつてあはれにうらうらに
乃時法に数えりて又の海を

あはれ病のさすれらるるにえんえんの
つらやうらうらなうらうらにふ備
さうさふせなほけらうらうらの
えんせららるるやうらうらに
心をもつてあはれにうらうらに
乃時法に数えりて又の海を

一 幸終え終く行身のりしを
 又 歸りぬる時 悔しむるを
 ゆ けりてん ことあるに
 之 つかへりてん ことあるに

梅のこゝろ

之

繪本^{えほん}下^{しも}經^{きやう}

高井蘭山先生述 北齋^{ほくさい}正^{ただ}老人^{らうじん}画

全二冊近刻

此書^{このしよ}經^{きやう}の文^{ぶん}小^こ平^{へい}と云^いふと附^つし又^{また}卷^{まき}の^のりしと云^いふと
 中^{ちゆう}の^のりしと云^いふと附^つし又^{また}卷^{まき}の^のりしと云^いふと
 されし師^しの^のりしと云^いふと附^つし又^{また}卷^{まき}の^のりしと云^いふと
 自^{みづか}らと云^いふと附^つし又^{また}卷^{まき}の^のりしと云^いふと

嘉永二年己酉五月

浪華 書肆 東都

河内 喜兵衛 須原屋 茂兵衛 須原屋 新兵衛

樂善堂

卷一

詩